HamaMed-Repository
浜松医科大学学術機関リポジトリ
浜松医科大学
Hamamatsu University School of Medicine

非妊時BMIおよび妊娠中の体重増加量と出生体重に関する検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2015-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 雄一, 本田, 由佳, 福田, 小百合, 竹中, 俊文, 池田, 申之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/2852

DOHaD 研究（ISSN 2187-2597）
2014 年 第 3 巻 第 1 号　41 頁

P-18　非妊時ＢＭＩおよび妊娠中の体重増加量と出生体重に関する検討

○佐藤　雄一、本田　由佳、福田　小百合、竹中　俊文、池田　申之

産科婦人科舘出張・佐藤病院

【背景】近年、本邦では思春期の早発化や未婚化・晩婚化の影響により高齢出産が増加し少子化に拍車がかかると同時に、不妊治療患者が増加している。さらに出生体重はこの十数年間次第に減少し、この背景には、女性の妊娠前からのやせ体型の増加も理由の一つと考えられる。最近はエピジェネティクスの研究が進み、胎児期の栄養状態が成育期、さらには成人期の健康に影響を受けるという DOHaD 仮説により、子宮内胎児の栄養状態の重要性が再認識されるようになってきている。今回我々は、胎児発育の視点から母体栄養状態を示す指標として妊娠前の体格、妊娠中の母体体重増加量と児体重との関係を調査した。

【方法】2011 年 1 月～2012 年 2 月まで、当院で正期産にて出産した 2614 例(母体年齢；31.4±4.7 歳、分娩週数；39.2± 1.3 週、初産婦 38.4%)を対象とした。妊娠前の体格は非妊時 BMI を用いて、やせ群(BMI<18.5) 、標準群(18.5~25)、肥満群(BMI>25)の 3 群に分け、母体体重増加量・出生体重との関連を検討した。

【結果】１）出生体重の平均は 2,997.7g±414.3g であり、低出生体重の割合は 5.9%であった。２）妊娠中の体重増加量は、やせ群 11.2±3.0kg、標準群 11.2kg±3.5kg、肥満群 8.0±5.0kg であった。3)出生体重の平均は、やせ群 2.992±345.6g、標準群 3045.0±371.9g、肥満群 3155.7±393.7g であり、非妊時 BMI が低いほど出生体重が低い傾向を示した。４）出生体重は母体体重増加量(r＝-0.20、p＜0.001)、非妊時 BMI(r＝-0.20、p＜0.001)と有意な正の相関を示した。

【結語】出生体重には妊娠中の栄養だけではなく、妊娠前の体格も影響していた。DOHaD 仮説の視点より、妊娠中の栄養指導や体重管理だけではなく、将来の妊娠を見据えた妊娠前からの栄養教育が必要と思われた。